



音楽家
細野晴臣

Haruomi Hosono

巻頭言 粗食と粗音

1年ほど前にチャップリンの傑作、『モダンタイムス』を久しぶりに見て強く感じたことがある。そのころは世界中が金融危機に揺れていたもので、映画の背景である1930年代の世界大恐慌と重なり、自分の音楽スタイルがいよいよ「不況」に適応していく予感を感じたのだ。ところがチャップリンにはほど遠く、自分はメタボであり、服にも穴が開いていない。そのギャップに違和感を覚えていた矢先に起こった激変を、この場に相応しいかどうかはさておき、記させていただく。

この20年ほど、ぼくは音楽を脳で聞いてきた。音楽ばかりではなく、食事も脳で食べていた。このことに気づいたのは、最近体調に異変が起きたからである。ぼくの場合、肉体的にはいわゆる生活習慣病からくる肥りすぎだったのだが、ついに限界を超え、結石などで痛みを伴い出したのだ。それで病院に駆け込むと、食事制限を指示されたのである。そこでやっと我が肉体を顧みたわけだ。

それがきっかけでみるみる体重が減少し、幸い病気の世界に迷い込むことは回避できた。そしてつくづく自覚した。ぼくは脳みそを喜ばせるために食事をし、音楽を作っていたのだ、と。

スタジオにこもって音楽を作っているとき、ぼくは肉体感覚を忘れてしまう。トイレも食事も忘れてしまうので、身体が悲鳴をあげているのも聞こえなくなっていた。食事のときも同じように身体より脳みその喜びを優先してきた。身体の「もう充分」という声が聞こえず、ひたすら脳が満足するような食事をしていたのだ。

だが身体の言うことを聞くようになったいま、自分に必要な食べ物や音楽がいかに少ないかを痛感している。響いてくる食も音も少なく、栄養が足りない感じがする。しかし足りなければそれもよし。基本的には粗食そして粗音に親しむ、これが現在の心境である。